

「七月のキノコ(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

伊沢正名(いざわまさな)という写真家をご存じだろうか。優れた自然写真家の一人で、主として「コケ類」「キノコ類」「変形菌類」等の撮影を得意とする。

「野糞の実践家」としても有名だ。私は高校生の時、菌類学者の今関六也氏著の『キノコ』(山と溪谷社)に触れ、キノコの世界にすっかり魅了されてしまった。高校の文化祭で仲間とキノコの研究で個人参加し、生物部を抑えて、最高賞(高山賞)を受賞したことがある。その本の写真を担当したのが伊沢氏だ。

氏の写真は、キノコの「形態的特徴」だけでなく、「どんな環境の場所に」「どのように生えているのか」まで1枚の写真でわかる撮り方をしていた。今回、それを思い出し、あえて多くの方が持っている「スマートフォン」のカメラでキノコを撮ってみた。



これは「チシオタケ」という小さなキノコ。桃色の透き通った傘を持ち、傷つけると赤い血のような汁を出す。普通はこのような角度で撮るだろう。この撮り方でも十分に美しいと思う。撮る姿勢も楽だし、スマホの構え方も容易だ。しかしこれでは、茎の色や質はわからないし、傘の裏側の「ひだ」の密生度や色もわからない。キノコの同定(種名の決定)では、茎やひだの様子が重要な決め手になることが多いのだ。



そこで「伊沢式」に構図を変えて撮ってみた。小さな切り株の下から狙うので、スマホを持って、地面に寝転がる必要がある。キノコの撮影には「ブルーシート」が必要だ。これだと、茎の色、ひだの密生度や色、それに朽木の隙間から発生していることまでわかる。



上の2枚はごくありふれた「オオホウライタケ」だが、雲泥の差だ。上の写真では、落ち葉から「カラムツ林」ということしかわからない。しかし下の写真では、木々の多い、やわらかい土の上とわかる。撮る構図で「情報量」が格段に増えることを実感できた。